

論文

## 戦前期尾西地域における健康と生活

### Health and Life in the Bisai Area Before World War II

二谷智子\*

FUTAYA Tomoko\*

#### 要旨

本稿の目的は、愛知県尾西地域に居住した二家族の家計簿と回想記を分析することで、戦前期における人々の健康と生活実態を明らかにすることである。資産家の家計分析や1920年代から1940年までの家計調査から、日本では医療サービスにおける都市と農村の格差があったと考えられる。しかし、俸給所得者の生活状況がわかる家計簿は、十分ではなく、その具体的な生活状態や医療支出については、検討の余地が残されている。二家族の事例分析の結果、両家とも1920年代末には、家族構成員が重篤な病気になった場合、大学病院で治療を受けていた。ただし、その医療費は多額であった。また両家ともに健康への意識が高いことは、共通した特徴である。

#### Abstract

The purpose of this paper is to clarify the health and living conditions of people in the prewar period by analyzing the household accounts and memoirs of two families who lived in the Bisai area of Aichi Prefecture. An analysis of the household finances of wealthy people and household finance surveys from the 1920s to 1940 suggest that there was an urban-rural gap in medical services in Japan. However, there are not enough household accounts to show the living conditions of salaried workers, and their specific living conditions and medical expenditures are still subject to examination. A case analysis of the two families showed that, at the end of the 1920s, both were treated at university hospitals when family members became seriously ill. However, the medical costs were significant. It is also a common characteristic of both families that they were highly conscious of their health.

#### キーワード

尾西地域、医療、健康、生活

#### Keywords

Bisai area, medical care, health, lifestyle

---

\* 愛知学院大学経済学部教授

## 1. はじめに

本稿は、愛知県尾西地域に居住した2つの家族の記録をもとに、戦前期の人々の健康と生活を検討する。かつて、中西聡とともに明治期から昭和戦前期における人々の消費と生活の変化について、地方の有力資産家である6つの家族の家計史料をもとにした実証的分析の研究を、『近代日本の消費と生活世界』にまとめた<sup>1</sup>。そこでは、この6軒の家について衣・食・住をはじめ冠婚葬祭を含む費用、教育費や医療費など、具体的な家計支出の項目とその金額の推移から、消費にともない次第に変化していく暮らしの姿を描いた。また同書では、それらの地方資産家の事例分析を相対化するため、両大戦間期に日本で広く行われた家計調査の結果を組み合わせ検討した。そこで判ったことは、医療費・教育費・冠婚葬祭費をみると、給料生活者世帯と労働者世帯では、家計支出にしめる医療費支出の比重はそれほど変わらなかったことである。つまり都市生活では、医療サービスや教育サービスは、貧困層を除けば、それなりに等しく受容できるようになっていたと思われた。もっとも農業者世帯の医療関連支出の比重は、給料生活者世帯や労働者世帯に比べるとかなり小さく、とりわけ医療サービスにおける都市と農村の格差は、残ったと考えられる。それゆえ農村地域に居住していた地方資産家層は、頻繁に大都市から医師を招いて診察を受け、また大都市の病院に赴いて医師の治療を受けていたのである。一方、家計調査の結果からは、家計に余裕のない農業者世帯は配置売薬や民間薬などを利用し、セルフメディケーションで体の不調や病気に対処していたのではないかと推察するに止まった<sup>2</sup>。

そうした意味で、同書で事例として取り上げた資産家層より所得階層が低い家に残された家計史料や日記などの一次史料をもとに、戦前期において人々がどのような医療サービスを利用して家族の健康を維持しつつ生活したか、具体的な事例分析から明らかにすることは、課題として残された。

そこで本稿では、尾西地域の2つの家の所蔵史料<sup>3</sup>をもとに、昭和戦前期までの人々の健康と生活の状況を、史料に基づいて具体的に明らかにする。以下、第2節では、愛知県葉栗郡北方村曾根（現：一宮市北方町）の村本家を取り上げる。村本家については、1903年に生まれた3代目当主の村本利廣が、青年期以降の日記から回想記（「思出の記」）<sup>4</sup>を編んでおり、それに基づいて1910年頃から1936年までの家族の健康と生活について検討する。第3節では、愛知県海部郡津島町（現：津島市）の堀田廣之家に残された家計史料をもとに、1915年から1936年までの医療費の内容を検討することで、家族の病気や怪我への対応を明らかにする。

<sup>1</sup> 中西聡・二谷智子（2018）を参照。

<sup>2</sup> 同上書、391頁-392頁と二谷（2017）155頁-166頁を参照。

<sup>3</sup> 村本家文書は、名古屋大学大学院経済研究科附属国際経済政策研究センター及び村本家に、堀田家文書は、堀田廣之文庫・旧堀田廣之家住宅（松永氏宅）に、所蔵されている。史料閲覧に際し、資料所蔵者の皆様から受けたご厚意に感謝申し上げます。なお、堀田廣之家所蔵史料を紹介して下さったのは、本学経済学部の関根佳恵教授である。堀田廣之家をご紹介くださった関根教授に心より感謝したい。

<sup>4</sup> 「思出の記」は、村本利廣が誕生した1903年から1988までの85年間についてまとめているものである。B5版ノートで全6冊、ノートの表紙には、「思出の記 1」のように巻号があり、第6冊目ノートの最終頁まで通したページ数が付されている。以下、本稿では、ノートの巻号とページ数を、引用する史料の末尾に付した。なお、原史料の引用では基本的に原文に即しつつ必要に応じて句読点を補って記した。

## 2. 愛知県一宮市の村本家の事例

愛知県一宮市北方町の村本家は、近世期から同所で農業を営んでいたと考えられる。明治の町村合併で、同所は1906（明治39）年に葉栗郡北方村大字曾根となったのであるが、葉栗郡黒田町大字曾根が北方村に分離編入される際に、村本利廣の祖父である村本利七（1849年生-1916年没）が、同意書に惣代として署名した。村本利七については、「私の生れ出る既に前、祖父は転業して篤農家になっていた。併し年代は知らぬが嘗て呉服商を営んだ時代があった。呉服物を納める戸棚や呉服箱が今でも存在して当時のことを示している。」（「思出の記」1、5頁）とあり、1870年代には呉服太物商を営んでおり、少なくとも1900年代までは商売を続けたようである。利七が商売をやめた後は、農業に専念した。利七の息子の村本賢治（1877年生-1928年没）は、役場勤務を経て、織物組合に勤務していた。「父（賢治）が繊維の検査をしていたので、母と共に任地の祖父江町森上に暫く住んだことがある。」（「思出の記」1、1頁）との記述から、父親の賢治は繊維検査の仕事をしていた。1927（昭和2）年に、村本賢治の長男である村本利廣（1903年生-1994年没）は、岐阜市立岐阜商業学校、彦根高等商業学校、名古屋高等商業学校で修学後、愛知県内の商業学校で教員として勤めることになった。利廣が就職した翌年の春に、父親が病気の為亡くなり、その後の利廣は、文字通り一家を支える働き手となって祖母、母親、3人の弟と妹と生活した。兄弟が成長した1936年春に、利廣は結婚した。

本節では、「思出の記」をもとに、彼が誕生して結婚する1903～36年まで、約30年余りの回想記から、尾西地域に暮らした家族の健康と生活を見ていく。

### 2.1. 「思出の記」にみる北方村の生活

「思出の記」には、1910年代頃の北方村の生活について、「村の生活状態」およびその当時の「衣」、「食」、「住」について記述がある。以下に、それを紹介する。

#### 「村の生活状態」

殆んどが専業農家が多く併も小作が大部分を占めていた。小学教員も一、二人はあったが家人は農業を営んでいた。田畑を交え平均4段—40アール前後を耕作していたろう。田は二毛作で米以外小麦、大麦、馬鈴薯、菜種を作っていた。

田くねは、最も激しい重労働であったと思う。これをしなくては、二毛作は不可能である。畑には桑、麦類、豆類、薩摩薯、其他各種の野菜が作られた。

当時は養蚕が盛んだった為、桑畑は多く、蚕を飼わなくても桑葉を摘んで売却する農家もあった。野菜は殆ど自家用のもので、換金の為に出荷する市場らしいものがない有様であった。僅かな米の収穫も大半は自家用で、残りの売却用の米も冬以後でなければ現金に換えることが出来ず、一般に農家は現金収入が少く、相当困窮状態で生活水準は低いものであった。

毎日が労働日で農繁期に雨が降れば、「いゝおしめりでございます。明日はどうぞお休み下さい」と、当番の者が戸毎に傳えて歩く。休むのは特別のお慈悲によるもので、何か大き

な力で強制労働でもさせられているかの感がする。

又慰安となるものは殆どなくお盆、お祭、お正月くらいだけがのんびり出来て其の他の日は夜まで働く人が多かった。男は薄暗い土間で縄ない、わらじ、草履、筵作り、女は男の作業衣のつくろい、子供達の着物、足袋の手当など、冬は細々とした火鉢の暖を取るだけでの仕事は実に辛いものであった。」（「思出の記」1、15頁）

日露戦争後の愛知県内の農村の生活状況については、『愛知県史』（通史編7近代2）に<sup>5</sup>、当時の農村社会の変貌ぶりが明らかにされている。1906（明治36）年末の愛知県内市郡別に人口を見ると、名古屋市・豊橋市の二つの市と愛知郡・東春日井郡・額田郡・北設楽郡の4つの郡では現在人口が本籍人口を上回っていたが、それ以外の郡では、本籍人口の方が多かった。つまり本籍をその村に残しながら、そこに住んでいない人々が多く、日露戦後の農村からの人口流出現象が、ある程度、その姿を明確にし始めていた。所得階層や地域により相当の差を含みながら、化学肥料の購入などから農村生活者が商品経済に巻き込まれ、消費を抜きにして農村生活をするのが難しくなった。とくに養蚕は、農家に現金収入をもたらしたが、同時にその収入により農家は消費が可能になり、消費経済に巻き込まれていった。自小作層・小作層は、より効率的な現金収入の途を求めたが、日露戦後の名古屋市をはじめとする県内の各都市では、商工業が発達し、農業労働に比して割の良い労賃の仕事が増えており、農村部から都市部・町部への人口流出に繋がったのである。

もっとも農村から都市への人口流出の要因は、都市化に伴い医療サービスなどの社会的インフラが整っていたことも、その要因であったと思われる。たとえば、村本利廣自身の記憶にはないが、以下のように、母親から伝え聞いたと述べている。

乳幼時から虚弱で特に胃腸が悪く、其の為名古屋の斉藤病院に入院していたか、或は通院の為に下宿していたのか、兎に角、かなりの間母と共に名古屋住まいをしていたと聞いている。其の後自宅へ帰ってからも「小学校へ通うようになるまでは我が子と思うな」と、母は主治医に云われたと、時々語ったことがある。

生後5ヶ月の乳児で姉（すゞこ）が死んでいるので、格別心配していたのであろう。」（「思出の記」1、1頁）

村本家では利廣の上に第1子として誕生した姉がいた。しかし、彼女が生後5ヶ月でなくなった経験と、その後に誕生した長男利廣も虚弱体質であったことから、子どもに医療を受けさせるため、村本家では、母子で名古屋に住むことを選択したのである。

では、1910（明治43）年ころまでの地域の人々の暮らしぶりを、衣・食・住を中心に見ておきたい。

「衣」

大人も子供もまだ和服だけの時代、化学繊維はなく木綿が衣服の主流をなしていた。

<sup>5</sup> 以下は、愛知県史編さん委員会編（2017）284頁-292頁を参照。

外に麻と絹物が少々あっただけ。

男は和服にへこ帯、商人は角帯に前垂がけ、女は元禄袖にしごき、子供は筒袖の紺緋、冬は一般に棉の入った部厚い着物に羽織をまとい、足には足袋、履物は草履、下駄、高下駄（雨の日用）を用いた。

学童は雨の日に唐傘をさす者は10人中1～2人、他は蓑（畳表）を編んだものを被って登校する。一般は番傘、女子の一部は蛇の目傘を使用し、洋傘は余り見られなかったのである。（「思出の記」1、16頁）

### 「食」

白飯を常食とする家庭は極めて少なく、殆どは大麦まじりの麦飯である。

味噌、醤油、漬物は自家製、小麦を水車舟や工場で小麦粉にして手打ちうどんを作り、よくに込うどんとして食べたものである。

木曾川には流水を利用して製粉する水車舟が鉄橋の上手に十数隻も繋留してあって需要に応じたものだった。麦飯に変化を求めれば、うどん以外には余りなかったんだろう。（「思出の記」1、15頁）

学童の弁当は、麦飯に梅干、塩鮭だった。当時、鮭、鰯、鯖は、割合出廻っていた。遠足には白布に梅干の入った握り飯（日の丸弁当）を包み、肩から斜に脇下へ掛けたものだ。

おやつは煎った大豆、蒸した薩摩薯の乾燥品、せんばやき（ねつた小麦粉を焼いたもの）、菓子はゲンコツ（原料は大豆粉）ヨボシアメ（薯飴のこと）シコラン（麦が主体）猫の糞（原料は大豆、形から取った名称）飲物はケイロー水、ラムネ、ミカン水（1本1銭）、サイダー、氷（センジ、イチゴ飴などをかけたもの）他にトコロテンなどがあつた。

当時は砂糖の木と称して甘蔗を栽培し、其の幹を子供達が好んで咬んだものであるが、いつの頃からか作らなくなった。（「思出の記」1、16頁）

### 「住」

住宅は殆んど藁葺屋根の平屋で、屋敷の南面は農作業用の為に当て、多くは北側に建てられている。床に畳のない部屋は藁の敷いてある所もあつた。壁は室内以外は荒壁のままで手抜きのある所の所も多く、朝晩雨戸を繰り開け締めの手数をかけたものである。室内は障子で硝子戸は余りなかった。（以下中略—引用者）。

明治24年（1891）10月の濃尾大震災で村中の建物が全壊した後、人々は恐れて多く平屋に、又二階も中二階とて物置用にしかならないものを建てたのであつた。古材を用いて再建した所もあり、住宅にも無理があつたのではないか。

我が家は主家、離れ座敷、倉、物置、便所等何れも瓦葺で恵まれていた。そう物置だけが当時は藁葺であつたことを覚えている。（「思出の記」1、16頁 - 17頁）

村本利廣が子どもの頃には、衣類は、和服が主流で、化学繊維を素材とするものはなく、麻や木綿など近世以来の布地をもとにした着物が使用されていた。履物も下駄、高下駄、草履であつて靴



ではなかった。洋傘を使用する人は殆どいない状況であった。また食生活では、麦飯が中心で、うどんを食していた。味噌、醤油、漬物は自家製であった。魚は、鮭、鯛、鰯が出回っており、学童の弁当には塩鮭が入れられた。しかし、こうした食生活では、やはり栄養は足りなかったようであり、以下のような述回がある。

粗食で栄養分もビタミン類も少く一寸した傷も化膿してしまう。(以下中略—引用者)。

ネプトと称するおでき、直径2～3cmの小山が、額や頭に五つ六つも出来ている子供が、随分よく見られた。近所で子供が、その膿を押し出してもらって、泣きわめくのを見聞きするのは、辛いことであった。皆食生活がよくなかったのに帰因する。(「思出の記」1、15頁-16頁)

その一方、子供のおやつは、1本1銭でラムネやミカン水、サイダー、夏場には氷、トコロテンなどを購入して、食べた様子が伺える。住居に関しては、1891(明治24)年の濃尾地震の影響があり、殆ど藁葺屋根の平屋であったという。地震で村中の建物が全壊した後に、その後の地震発生をおそれて、人々が平屋を中心とする建物を建てた、との指摘は重要である。

## 2.2. 「思出の記」にみる病気と医療

村本利廣は、幼少の頃から虚弱であった。名古屋市内の病院で治療を受けるため、一時、母親と二人で名古屋市内に暮らしていたことは、先述の通りである。こうした理由から、利廣は、自らの体調と家族の健康については、常に気を配って生活していたと思われ、「思出の記」には、家族の病気とそれへの対応に、かなりの紙幅が割かれている。特に1920(大正9)年、スペイン風邪に家族が罹患した時の対応と、1927(昭和2)年に発病して、翌年の春に亡くなった父親の病気に関する事情については詳しく書かれ、その当時の病気への治療やケアの様子が知られる。以下に、それを紹介する。

### 「スペイン風の恐怖」

伝染力強く死亡率の高いインフルエンザのスペイン風が第一次欧州大戦後全世界に拡がり、日本へも渡って来た。

大正9年(1920)3月の終わり多分24日のこと、二年生としての修業式を終って昼頃、勇雄は頭痛がすると云って帰って来た。38℃くらいあったろうか。我が家にスペイン風が侵入して来た初めであった。これが間もなく内中を大混乱に陥し入れることになろうとは、神ならぬ身の知る術もないことだった。

一、二日の内に次々と罹病者が現れた。高熱の為皆床に就くより仕方がなかった。重病の勇雄と母は座敷に、他は其の北の間に…。

最後まで発病しなかったのは、祖母と私(岐阜の4年終了時)、隆雅(5年終了時)の三人だけだった。病人全員39℃～40℃の発熱で如何にも苦しそう。

5人の病人の看護には手薄である。祖母は食事の用意をしても病人は食欲ゼロである。私は医者を呼び、薬受取で又看護に必死で休暇どころではない。

心配な一週間か 10 日間は過ぎて、治り始めた者は衰弱し切った体を漸く起こし始めたが、母と勇雄はどうも恐る可き肺炎となってしまった。

発熱と苦痛の連続で如何とも致し方がない。当時学校勤めをしていた水谷叔母も、夜は手伝に来てくれて、看護は専ら私と二人。文字通り寝食を忘れて頑張った。叔母の応援は本当に有難かった。私にはどれ程精神的支えとなったことか。病人が呼吸し易いように、湯を湧し蒸気を立てる。中戸や柱は蒸気で水浸し。二時間の間隔で湿布を取替えねばならぬ。嵩の少いタオル程度の生やさしいものではない。幅 30 cm 余の厚いフランネルの布で胴を一卷余りする長いものを熱い湯に浸して之を絞る。病人が苦しまないよう注意しながら胴に巻く。衣服をぬらさぬ為更に其の外側をカッパで包むのである。

二時間は直ぐやってくる。患者は二人。昼夜幾日も続くと無性にねむたくなる。今度はこちら二人共作業のつらさよりも睡魔との戦の方がえらくなる。夜昼の区別がしにくくなる。頭はボンヤリ、体はフラフラ。でも甘えてはおられない。何としても命は取り止めねばならぬ。回復した他の病人達は、とてもまだ応援に来てくれる状態ではない。病人とこちらと、どちらが先に行きついてしまうだろうか。

診察を終えて帰られた筈と思った医者（先代の小沢さん）の小声が、離れ座敷でしているようだ。行ってみると祖母と叔母と三者鼎談の最中、私の接近に気付いて話を中止してしまった。後で判ったことだが母はもう駄目だとのこと。母はチアノーゼを起こしている。唇や手の爪が紫色に変じている。呼吸障害の為であろう。此の時、母は都合悪くも妊娠八ヶ月だった。流産は免れまい。否必ず流産はする。其の時が生命を終る時だという。

此の流産の話は少し前にも聞いていたが、今はも切迫して時間の問題だろう。一体どうすればいいのか。父と相談も出来ない。現在の混乱状態では仮令不幸があっても、葬式をすることも不可能である。病人はうわ言を云う。無限の悲しみを内に秘して、必死に看護を続ける。勇雄は、此の頃一歩早く死地を脱したようだ。母は一、二日しても流産はなく、湿布を取替える度毎に大きな腹で如何にも苦しそう。其の内一週間ほどして、奇跡的に一本当に奇跡的に回復へ向かいつつあった。死からの恐怖を脱し、一家全員に気力が出始めた。発病以来一ヶ月余だったろうか、めでたく床上げすることが出来たのは…。

一方、勇雄も病気は治癒したけれ共、衰弱甚しく初夏まで歩行困難で、室内を壁のように両手をついて移動していた。小児の時より喘息が悪くて、此の度肺炎にもかかったらしく、極端に痩せこけ、手足の関節が竹の節のように見えていた。

学校は勿論長く休んだ。彼が短命に終る運命にあったのは、今日の極端な体の衰弱が重大な遠因を為したことは、誠に気の毒且つ残念でたまらない。（「思出の記」 1、23 頁-24 頁）

スペイン・インフルエンザ（1918～20年）は、推定死亡者数は最大の推計では、世界で 5000 万人と言われる。当時の世界人口 16 億人のうち、少なくとも 5 億人が感染したと考えられている<sup>6</sup>。日本での流行は、内務省衛生局『流行性感冒』（1922 年）によると、「前流行」（1918 年秋～19 年春）

<sup>6</sup> 加藤茂孝（2013）139 頁を参照。

は、患者 2116 万 8398 人、死亡者 25 万 7363 人、「後流行」（1919 年暮～20 年春）は、患者 241 万 2097 人、死亡者 12 万 7666 人とされ、合計で患者 2358 万 495 人、死亡者 38 万 5029 人とされているが、いくつかの県で数値が把握されておらず、これは過小評価ではないかとされている<sup>7</sup>。

村本家での感染状況をみると、かなり短期間で感染が拡大した様子が分かる。ただし、感染者すべてが重篤な状態になっていないことも気を付けておきたい。弟の勇雄は小児の時に喘息を患っていたし、母親は妊娠八か月であった。このような身体の状況で、スペイン・インフルエンザにかかれば、その症状が重篤となったのである。利廣は、スペイン・インフルエンザが弟の体に与えたダメージは大きく、後年になり弟が短命に終わったのは、この病気が一因であったのではないかと推測している。

この時、往診した医師は、北方村曾根で 1913（大正 2）年に開業した小澤郁二と考えられる。小澤医師は、1911（明治 44）年に岡山医専を卒業後、名古屋好生館および新潟市若松病院で実地研究を重ねたあと、北方村で開業医として活動し始めた<sup>8</sup>。大正期以降の北方村には、開業医がいたのである。家族に病人があった場合、村本家が最初に診察を受けたのは、小澤医師であった。それは、利廣の父親の病気が分かった時の記述からも窺える。

#### 「家族の病気」

今日に始まったわけではないが、家族に病人が多い。特に、父と母は時々発熱、とりわけ父は普通ではないらしい。5 月のいゝ気候の時に二人共臥床、勇雄もよくない。兄弟も時々風を引き腹をいためる。私は年中胃腸がよくない。…（中略—引用者）…、（1927 年—引用者）5 月 27 日、父は風以外に何かあるらしい様子、小沢医のすすめで起の中島医院へ行ってみる。スイッチを入れると、パシパシと鳴って火花を散らす古いレントゲンで診断。だが異常はないとのこと。

翌 28 日、更に岐阜の松山医院へ行ったが留守（これは以前から信頼していた医者）。29 日、行く末を案じて父は昨夜殆ど寝ず、朝早くから裏へ床几を出して悩んでおられた。私は非常なショックを受けた。どうすればよいか。名古屋の大学病院行きをすすめた。

8 月 2 日、名古屋の大学病院—当時は愛知県立大学付属病院で高名なあの勝沼精藏博士の診察を受けた。結果は白血病ではないかと。次で 4 日、桑原博士の診察では外科的のものではないかとのこと。6 日、始めてレントゲンの深部治療を始めた。此の頃腹部右側に堅い部分が触感ではっきり分る状態だった。13 日、外科の桐原博士の診察を受ける。腹水を採って調べなければよく判らないとの話。父は極端に注射をきらう人、今堅く拒否するので敢えて強行せず断念。15 日、急に 38℃の発熱、内心非常に憂慮。

結局勝沼博士は腸間膜腫瘍ではないかと、再度服薬とレントゲン療法を続けることになった。一人で病院通いされる日もあり、私の付き添える日はお伴をした。学校の帰りに薬を取りに行ったことも度々ある。かくて同じような繰返して昭和 2 年は終わった。思うに癌性のものと判っていても、多分ははっきりそれと発表しなかったただけだろうと考える。（「思出の記」1、37 頁-38 頁）

<sup>7</sup> 速水融（2006）234 頁-236 頁を参照。

<sup>8</sup> 本田六介編（1925）の愛知県の項 51 頁を参照。小澤医師は、1925 年当時、学校医と郡医師会理事であった。



1927年5月に、父親がいつもとは異なる不調を訴えるようになり、まず小澤医師の診察を受けた。小澤医師は、レントゲン施設をもつ中島医院を紹介してくれた。しかし、そのレントゲン施設が古かったこともあってか、利廣と父親は、岐阜県内の松山医院を訪ねたが、医師が不在で診察を受けられないままとなる。その後、父親は名古屋にある愛知県立大学附属病院で、勝沼博士の診察を受けることになる。しかし、その診断が難しく、8月2日から13日にかけて、同病院で3名の医学博士の診察を受けた。最終的には、勝沼博士が腸間膜腫瘍ではないかとして、服薬とレントゲン療法を続けることになった。

父親は、1928（昭和3）年3月に、自宅での療養中に亡くなったが、最後は小澤医師が往診している記述がある（「思出の記」1、38頁 - 40頁）。利廣は、「思うに癌性のもので判っていても、多分はつきりそれと発表しなかつただけだろうと考える」と述べているが、この当時の癌の治療は、上述のような内容であり、完治することは難しかったと考えられる。

「思出の記」には、父親の死後も家族の健康状態について度々述べられている。1931（昭和6）年の「本年の回顧」には、「本年は非常に不景気であった。予てより取沙汰されていた公務員の減法問題が断行される旨の号外が5月23日終に出た。そして6月1日付けで私も減俸となった。是は空前絶後の処置である。…（中略—引用者）…家族は風邪や胃腸が悪く栄養不良に帰因したか。」（「思出の記」2、46頁）とある。不景気の為、利廣の給料も減俸されているなか、家族には風邪や胃腸の調子が悪い人が多くあり、その原因を栄養不良とみなしている。翌1932年の「本年の回顧」には、「昭和3年以来支那と戦い、五・一五事件を起こし首相を殺し、満洲国を独立せしめ、学校でも亦野外演習、強行軍、査閲、実践参加者の軍事講話を行うなど、凡そ平和とかけ離れた事件発生や行事が行われ、世に落付がなくなってしまった。」（「思出の記」2、48頁）とある。1934年になると、「私を始め全員が風邪や胃腸をいため、毎日誰かが悪い状態が続き通しだった。外部では陸海軍の行事が多く、点呼、神社への戦勝祈願、渡満部隊の見送り、帰還兵の歓迎、学校では配属将校出征による交迭が方々で行われた。」（「思出の記」2、52頁 - 53頁）と回想している。そうしたなか1936年の春に、村本利廣は、お見合い結婚をした。この年の「本年の回顧」には、「此の昭和11年はcontaxカメラ購入、二・二六の大事件発生、二人に大切な結婚式あり、…（中略—引用者）…、重大なことが多くあった。…（中略—引用者）…、私始め家族の病気は、依然多かつて残念だった。」（「思出の記」2、55頁 - 58頁）と、振り返る。

1932年から36年の回顧からは、満州事変後、愛知県の人々の日常生活の暮らしのなかに、戦争に関係する行事が増えだした様子と、それと並行するように、当時の村本家の家族の人々の健康状態も、良いとはいえない状況であったことが読み取れるのである。

### 3. 愛知県津島市の堀田家の事例

本節では、1915（大正4）年から1936（昭和11）年までの約20年余りについて、愛知県津島市の堀田家の医療関連支出を分析する。愛知県津島市の堀田家は、近世初期に津島神社の祠官

から分家した堀田理右衛門之理を初代とする<sup>9</sup>。近世期は酒造業を営むとともに広大な田畑を保有し、尾張藩寺社奉行御用達となり、1871（明治4）年には10代堀田善之が戸長に任じられ、89年には津島神社氏子総代に選ばれるなど、近世に引き続いて地域社会での名誉ある地位を維持した。ところが、11代堀田之孝が病弱であったため、20世紀に入ってからの堀田理右衛門家は、表舞台に登場することはなくなった。病弱な11代目に代わって家政を預かったのが、本稿で事例する分家の堀田廣之家である。10代義之の3男であった廣之は、東京の中央大学で法律を修めた。その折に世話になったのが東京の弁護の高木益太郎であった。病弱であった兄の之孝を助けるため、父親の命で津島に戻った廣之は、1913（大正2）年に結婚して分家し、本家の隣地に屋敷を建てた。分家した際に、本家からある程度の財産分与を受けたが、1915年に兄之孝が亡くなったので、それ以降は廣之が本家の田畑の管理を行うことになった。こうした事情もあり、堀田家に残された家計史料である各年度「日記（帳）」は、1915年から始まっている。

### 3.1. 戦前期における堀田廣之家の家業

堀田廣之は、家業の新田経営を行うため、新田の共同開発者と1911（明治44）年に境殖産合名会社を設立した<sup>10</sup>。くわえて東京で世話になった弁護士の高木益太郎が、津島に本社を置く尾西鉄道の経営者になったため、本家から尾西鉄道会社株を譲り受け、後にその取締役として高木を助けた。高木益太郎は、堀田善之の知人で、1910年代前半に衆議院議員を務め、1900年代からは尾西鉄道会社の有力株主で、1910年代から同社の経営を担う資産家でもあった。ただし、1925（大正14）年に、尾西鉄道は名古屋鉄道に合併されることになったが、会社清算業務を行ったのは、同社の役員をしていた堀田廣之であった。尾西鉄道会社がなくなった後、廣之は花卉栽培を始めて、津島における花卉栽培の草分けとして評価された。堀田本家が始めた新田経営は、合名会社を設立し昭和戦前期まで継続したが、拡大する方向性はみられなかった。むしろ廣之家の資産運用は、株式投資に向けられた。

### 3.2. 堀田廣之家の「日記（帳）」にみる医療関連支出

1913（大正2）年に、堀田廣之は三重県桑名の代表的な米穀商伊藤紀兵衛の娘つねと結婚した<sup>11</sup>。結婚から3年後の1916年には長男正之が誕生し、続いて1917年には長女登代子、1920年に次男康之、1924年には三男頼之が生まれ、3男1女の父親となった。第1表は、1915年から1936年の堀田家主要医療関連支出を、家計史料である「日記（帳）」から析出した内容である。

第1表をみると、正之が誕生した1916年に多田医師の診療を受けていることが確認される。当時、多田医師は、名古屋市で著名な小児科医であった。生後間もなく、不調になった正之を往診したと考えられる<sup>12</sup>。坂田医師と堀田医師については、残念ながら誰がどのような理由で診療をうけたか不明であ

<sup>9</sup> 以下、堀田家の歴史については、中西聡（2023）5頁-9頁を参照。

<sup>10</sup> 以下、堀田家の家業については、中西聡（2023）8頁-9頁を参照。

<sup>11</sup> 以下、堀田廣之家の家族については、中西聡（2023）8頁と中西聡・二谷智子（2023）106頁を参照。

<sup>12</sup> 愛知県知多郡小鈴谷村の有力醸造家であった盛田久左衛門家も、子どもが病気になった際には、名古屋在住の小児科医多田学三郎に往診をしてもらっていた（中西聡・二谷智子（2018）81頁を参照）。

第1表 1915～36年堀田廣之家主要医療関連支出の動向

単位：円

年	堀田医	多田医	坂田医	井桁医	中村医	田辺医	歯医者	病院	検査料	薬類購入	オブラート	産婆	診察券	その他
1915										0.28				
1916	1.58	10.95	5.24							0.35		4.2		乳母(10.1)
1917	6.08	4.52	7.57							1.79				体温器(0.85)
1918		3.27	17.63							0.86				
1919	14.70	3.84				17.10		159.55	2.92					
1920	20.34	4.21	伊藤医	1.20				36.24	6.15	9.97		25.3		登代子繃帯交換手術、X線検査
1921	13.50	7.42	12.90	68.05	川村医	鈴木眼科		0.50	3.50	3.55				体温器(1.6)、山田・田辺医(3.1)
1922		47.02	黒田博士	132.95	17.70	3.10	2.40	4.13	3.50	10.96			6.0	診察券(6.0)、体温器(1.1)
1923			33.40	84.50	35.60		3.40			4.88	0.08			洗眼料は川村医
1926		木村		49.70	7.35	矢野眼科	1.50	108.05		10.63	0.32			つね・頼之入院
1927		9.00		76.60		7.86	12.50			6.17	0.07		3.0	診察料(3.0)、体温計(1.7)
1928		6.00	清水医	30.10		3.80	1.80			6.32				洗眼料は矢野医
1929	4.00	5.00	30.00	133.90	葛谷眼科	6.30	48.70	4.50	1.50	37.39			1.0	歯医者は平山、胃液検査、
1930	舟木医			35.30	20.60	森島医		52.80	16.50	38.17			1.0	洗眼・手術は葛谷医、青木医(0.7)
1931	2.00			51.10		16.04				19.95				洗眼料は森島、ビタミン(5.0)
1932			大鹿医	45.50		3.10	8.05	1.55		17.43			1.5	五井病院汽車賃(1.16)
1933			1.50	66.70	6.00	18.35				9.90				手術は葛谷、洗眼は森島
1934	平正医			29.80						6.75				
1935	35.20			7.40	内田医	矢野眼科				43.41				チフス薬(0.4)
1936				13.40	3.40	3.60				41.23			12.7	内田獣医、クレオソート(0.3)

(注) 多田医師は、1889年に東京帝国大学医科を卒業し、名古屋市東区で多田小児科医院を開業していた(本田六介編(1925)『日本医籍録』第1版、医事時論社、愛知県3頁を参照。)「病院」は、1919～20年が県立医学専門学校(1920年に愛知医科大学となる)付属病院への入院費用。それ以外は、病院名が判明しないが、「病院」と記載されている。

(出所) 各年度「日記(帳)」(堀田廣之文庫)より作成。

るが、両医師は津島町で開業していないことが、第2表に示した津島町の開業医師一覧から判かる。

また1919年と1920年に病院費用が合計195円79銭に上っていることを確認できる。これは長女の登代子が足を脱臼し、同年11月に手術が必要になり、愛知県立医学専門学校病院に入院したためである。X線検査を受け、「繃帯交換手術」を受けたことが記録されている<sup>13</sup>。その際に、特別謝儀を支払った成田先生は、1912年に愛知県立医学専門学校を卒業して、1925年時点で愛知医科大学整形外科講師であった成田與治郎医師と考えられる<sup>14</sup>。同様に特別謝儀を支払った池内先生も、1911年に愛知医学専門学校を卒業した池内昇医師と思われる。通常は多額の支出とはならない医療費だが、入院が必要な場合は高額となる。その意味では、1926年に廣之の母つねと息子頼之が入院した際にも、108円余りと多額の支払いをしている。

一方、第1表と第2表をあわせて見ると、地元津島町の開業医では、とびぬけて井桁医師への支払額が多い。1920年から36年まで支払いが確認でき、堀田家の家族は井桁医院を掛かりつけ医にしていた。そのほか目立って多いのは、眼科の診療である。1922年3月から眼診察料が支出に表れ、その後、鈴木眼科や川村医師、矢野眼科、葛谷眼科、森島医師と、医師を変えながら眼科を受診しつづけていた。眼科医については、地元の開業医を掛かりつけ医にしたわけではなく、眼科医を探して受診していたと思われる。

薬類の購入については、明確に薬の名称が記された場合もあるが、「薬代」としか記されていないことも多く、各年度の合計額を算出はできるが、その内容が分からないことが多かった。ただし、例

<sup>13</sup> 以下、登代子の入院については、「大正八年度 日記帳」目録番号F-5、「大正九年度 日記帳」目録番号F-6、堀田廣之文庫・旧堀田廣之家住宅所蔵を参照。

<sup>14</sup> 本田六介編(1925)愛知県の項10頁と14頁を参照。

第2表 津島町の開業医一覧

No.	氏名	生年	卒業	卒業年	専門	津島開業	医院名	経歴	備考
1	伊藤俊馨	1882	千葉医専	1905	内児科	1908	伊藤医院	仙台市加藤病院勤務	津島中学校医(昭3) 郡医師会副会長(昭17)
2	井桁省	1878	愛知医専	1901	内外科	1905	井桁医院	私立済生館病院勤務	郡医師会理事(昭3)
3	星野宗平	1849	従来開業			1884			
4	川村貫太郎	1883	愛知医専	1904	眼科	1913	川村眼科 医院	東大眼科選科河本眼科 病院勤務	郡医師会理事(昭3)
5	日比明	1890	金沢医専	1914	内外科	1922	日比医院	渥美郡田原病院勤務 →北炭夕張病院	郡医師会理事(昭17) 第三区衛生組合長(昭17)
6	永井昇	1855	従来開業			1888			
7	山田環	1865	愛知医学校	1891	内科	1892	山田内科 医院	愛知病院助手 →県立岐阜病院	郡医師会副会長(大14) 県医師会議員(昭3) 津島町衛生連合会副会長(昭3)
8	水谷雄二	1879	愛知医専	1901	外花科	1911	私立 済生館	陸軍軍医 →予備役	県医師会議員、郡医師会理事(大14) 日本医師会議員(昭3) 郡医師会会長(昭17) 郡学校医会長(昭17)
9	平野耕一	1890	愛知医専	1913	内科	1914	平野医院		
10	樋口文彦	1874	試験及第	1907		1909	樋口医院	三重県下に開業	郡医師会理事(大14) 県医師会予備委員(昭3)
11	本田政市	1880	愛知医専	1908	内科	1924	本田医院	愛知病院内科勤務 →神守村開業	県医師会予備議員(昭3) 郡医師会理事、校医(昭3)
12	大鹿潔	1892	東大医科	1917	内科	1925	大鹿医院	東京杏雲堂病院勤務 →軍医	津島伝染病院嘱託(昭3)
13	田中稲男	1889	京大内科	1917	小児科	1925	田中医院	京大小児科勤務 →岐阜県海津郡開業	
14	山本盛祐	1854	試験及第	1884					
15	澤井徳三郎	1846	試験及第	1884					
16	森島重順	1893	大阪医科大	1921	内科	1927	森島医院	大阪市山田病院 副院長	私立森島病院創設
17	大橋國富	1904	愛知医科大	1930	眼科	1937	共存病院	桐生組合病院 眼科勤務	共存病院眼科医長
18	岡田和雄	1902	愛知医科大	1930	内科	1934	共存病院	愛知医大病院 内科で研究	共存病院長
19	野田諦俊	1884	岡山医専	1908	外科	1930	野田医院	陸軍軍医→予備役	
20	馬島主計	1899	東京医専	1928	眼科	1932	馬島眼科 医院	東京の石津眼科 病院勤務	
21	寺本豊次郎	1906	愛知医科大	1930	外科	1939	共存病院	愛知医大病院 外科で研究	共存病院外科医長・福院長
22	畔柳晴雄	1908	名古屋医科大	1933	小児科	1935	共存病院		
23	水谷潔	1913	慶應義塾大医学部卒	1937			軍医 任官中	慶應病院生理学教室 助手 → 軍医	
24	森島錠三郎	1854	試験及第	1884	内外科	1882	森島医院		

(出所)本田六介編(1925)『日本医籍録』医事時論社、愛知県35頁-37頁、本田六介編(1928)『日本医籍録』第4版、愛知県39頁-41頁、東京医事時論社編(1942)『日本医籍録』第17版、愛知県61頁-64頁。

えば 1929 年 5 月 13 日には三共ビタミン 10 種を 27 円 51 銭で購入し、1931 年にもビタミンを 5.0 円で購入している。こうしたことから見て、堀田家は、健康維持に関する意識が高く、栄養分の知識を持ち、不足しがちな栄養分を補おうとする意識を持っていたと思われ、比較的高い価格であったビタミン類を購入していたといえよう。



#### 4. おわりに

本稿は、戦前期における愛知県尾西地域の2つの家族の家計史料と回想記を手掛かりに、資産家層よりは低い所得階層において、人々がどのような医療サービスを利用し、家族の健康を維持して生活していたかについて検討した。

日露戦後、農村部から都市部への人口流入が目立つようになったが、その要因は、名古屋市をはじめ都市部における商工業の発展により、都市部での労働需要が増えたからである。このため医療サービスの供給面で見ても、名古屋市内に愛知医科大学付属病院があるなど、当時の最先端の医療技術や知識を持つ医師は、都市部を中心に存在していた。村本家も堀田家も、地元の開業医では対応が無理な病気や怪我の場合は、愛知医科大学付属病院を受診し、治療を受けていた。注目しておきたいのは、1920年代末には、農村部に居住する俸給生活者の家計でも、重病の場合は、大学付属病院を受診していることである。1927年の村本家の場合は、北方村曾根に1913年に開業した小澤医師が、他の医師の診断を受けることを促したことが回想記に記されていた。地域の人々の掛かりつけ医として診療する開業医は、重篤な病気や怪我に直面した人々に、セカンド・オピニオンを求めることを促しており、また家族も病人に高次の医療サービスを受けるように促していた。ただし、堀田家の医療関連支出から判かるように、家族が大学付属病院に入院した場合は、多額の出費が必要となった。このように多額の医療費が必要になる事を知っていたからであろうが、日常生活では、両家とも家族の健康に気を配っていたことは、共通していた。

1937年の日中戦争勃発により戦時期に入るが、戦時下の村本家と堀田家の両家の生活状況と、いかに家族の健康を守ろうとしたかについての検討は、今後の課題としたい。

(付記) この研究は、2020～2021年度愛知学院大学経済研究所プロジェクト研究「戦前期における中京圏の経済と労働・生活—名古屋市を中心として—」(研究代表者：玉井金五)、および平成29年度～令和2年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))「大正・昭和期における住宅関連産業の展開と「暮らし」の変容に関する総合的研究」(研究代表者：中西聡、課題番号：17H02552)の研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 愛知県史編さん委員会編(2017)『愛知県史(通史編7 近代2)』愛知県。  
加藤茂孝(2013)『人類と感染症の歴史』丸善出版。  
中西聡(2023)「堀田家の歴史の概観と堀田廣之家の収支」『大正・昭和期における住宅関連産業の展開と「暮らし」の変容に関する総合的研究』(平成29年度～令和2年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))生活環境班研究成果報告書)序章、5頁-24頁。  
中西聡・二谷智子(2018)『近代日本の消費と生活世界』吉川弘文館。  
中西聡・二谷智子(2023)「堀田廣之家の消費生活—第一次世界大戦期から高度経済成長期」『大正・昭和期における住宅関連産業の展開と「暮らし」の変容に関する総合的研究』(平成29年度～令和2年度日



本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））生活環境班研究成果報告書）第7章、106頁-119頁。  
二谷智子（2017）「健康と医薬」『経済社会の歴史』名古屋大学出版会、第6章、148頁-170頁。  
速水融（2006）『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』藤原書店。  
本田六介編（1925）『日本医籍録（第1版）』医事時論社。

## 引用史料

「大正八年度 日記帳」目録番号 F-5、「大正九年度 日記帳」目録番号 F-6、堀田廣之文庫・旧堀田廣之家住宅蔵。  
「思出の記」（村本利廣）村本家蔵。